

# アンチテーゼ，ユートピア，鏡

## ——ブレヒトにおける東洋

渡辺 将尚

### 1

ドイツの劇作家ベルトルト・ブレヒト（1898 -1956）と東洋との関わりは、彼が未だ劇作家としての地位を確立する以前の1915年にまでさかのぼる。<sup>1)</sup> 彼はその後も東洋への興味を持ち続け、さまざまな作品において東洋モチーフを登場させている。本論文では、そのなかでも、『暦物語』（1953年）の末尾に収録された散文作品『コイナー氏談義』をとりあげる。

『コイナー氏談義』は、1929年から彼の死の年まで断続的に書き継がれていったもので、死後遺稿の中から発見されたものも含めて、それぞれテーマの異なる87の断章からなる。ブレヒトは生前、これらの断章群をその時々 of 意図に応じて集め、合計4回出版している。ここでとりあげる1953年の『コイナー氏談義』は、そのうちの3番目のものである。

この集成は、これまでで一番多い39の断章からなっているが、そこではアジアだけでなく、アラビアや古代ローマなど地理的にも時代的にも多様なエピソードが登場する。<sup>2)</sup> ここではそのうち、「友情への奉仕」と「司法」を中心的にとりあげる。なぜなら、これら2章はいずれも裁判または裁き（刑事的な裁きではなく、異なる利害を調整する民事的な裁き）という同じテーマを扱っており、さらに興味深いことに、このテーマは非西洋モチーフを使用していない断章でも取り上げられるものだからである。同じテーマをめぐる西洋・非西洋モチーフを比較することで、この作品の東洋像の特徴を明らかにしたい。まずは「友情への奉仕」という、アラビア人が登場する章を見てみよう。

### 2

「友人に奉仕する際の正しい方法の例として、K氏はつぎの話を最適なものに挙げた。『ある年老いたアラビア人のところに、3人の若者たちがやってきて言った。《私たちの父親が死にました。父は17頭のラクダを残し、

長男には半分、次男には3分の1、三男には9分の1を与えると遺書に決めました。未だに分け方で意見が一致しません。あなたが決めて下さい。》・・・』<sup>3)</sup>

K氏によれば、この問いに関してそのアラビア人は、自分の持っているラクダを1頭貸し与え、もういちど同じ方法で分け、余ったら自分のところに返してくれるように提案する。すると遺言通り分けることができ、3人は余った1頭をふたたび彼のところに返しに行く。この断章にはアラビア人が登場するが、ここでは「アラビア人＝難題をも容易に解決できる賢者」というイメージが表現されている。そのことはまた、この断章の最後にある文にも表れている。

「K氏は、このような友情への奉仕の仕方を正しいとした。なぜなら、それはいかなる特別な犠牲をも要求しなかったからだ。」<sup>4)</sup>

つづいて「司法」を見てみよう。つぎの引用はその冒頭部分である。

「K氏はしばしば古代中国の司法制度をある意味模範的なものであると言っていた。それによれば、大きな裁判があったときは、裁判官は遠く離れた地方から呼んでこられた。それによって、裁判官を買収されにくくすることができたのである。(つまり必ずしも買収されにくい人物である必要はなかった。)なぜなら、その土地在住の裁判官たちが、彼らを買収されないように監視していたからだ・・・」<sup>5)</sup>

ここで取り上げられているのは、裁きの中でも裁判官の買収と裁判制度の問題であるが、この「買収」というテーマは、他の断章群でもくりかえし取り上げられているものである。例えば、『試み・第1集』(1930年)には「人を買収しない能力」、また1929年の時点で執筆されていたながら出版の機会を得ず、死後遺稿という形で日の目を見た<sup>6)</sup>「買収されやすいことについて」などを挙げることができる。中国の裁判制度は、この作品群がくりかえし問題としてきたものに理想的な解決を与えてくれるものなのである。ところで前述のようにこの2つの断章には、いずれも大小の違いはあれ、裁きを問題にしているという共通点があるが、裁きを題材にした作品が、非西洋を舞台にしていることは、他の作品でも見ることができる。1944年に完成した『コーカサスの白墨の輪』(初演は1954年)でも、やはり裁きの場が登場する。飲んだくれで密猟者の役場の書記アツダクが、偶然の出来事から判

事となり、みごとな手腕を発揮し、名裁判を演じるというものである。これらの作品で描かれているのは、いずれも理想的な裁判なのであるが、ここで1つの疑問が浮かんでくる。理想的な裁判の形が、なぜことごとく非西洋モチーフを使って描かれているのであろうか。

3

ここでは、「友情への奉仕」および「司法」における裁きの描かれ方に着目して、この問題について考えたい。これらの章は、いずれも同じように、東洋の裁きを理想的なものであるとして終わる。すでに引用した文であるが、まず「友情への奉仕」では、

「K氏は、このような友情への奉仕の仕方を正しいとした。なぜなら、それはいかなる特別な犠牲をも要求しなかったからだ。」

「司法」では、

「結局、彼らは客観性という徳のために、たとえば感謝の念や親孝行や知人たちへの邪心のなさなどの他の徳を失ってしまうこと、また自分の周囲に敵をつくるほどの勇気をもつことを強いられなかったのである。」<sup>7)</sup>

これらの章と比較するために、別な例を引いてみよう。つぎの引用は、同じ集成に収められた「提案が受け入れられないときの提案」の全文である。

「K氏は、和解のための提案なら、ことによってはその提案が受け入れられない場合にそなえて、もう1つの提案を付け加えておいたほうがよいと勧めた。例えば、K氏は苦境に立つ人に対して、初めできるだけ他人を傷つけないようなやり方を忠告した。しかし、彼はまたべつのやり方も指示しておいた。これはもっとも思慮に欠けたものではなかったにせよ、初めより多少害のあるものだった。彼は言った。『なんでもやってのけるような人でない場合には、より少ないものから与えるということをしなければなりません。』」<sup>8)</sup>

ここで取り上げられているのは「和解」であるから、「友情への奉仕」や「司法」で語られていた裁きと相通じるところがあると言える。ただし、こ

の章で演じられている裁きは、先の2つの章のものとはその性格を異にする。なぜなら、和解のための提案が無視された場合のことが述べられているからである。このことが示すのは、現実には和解が簡単に成立しないこともありうることを、またそのためにもうひとつ別の可能性をたてておくべきであるということである。

同じ断章群の中に、もうひとつ裁きをテーマとした章がある。「的を得た答え」である。この章で裁きはどのように描かれているのだろうか。つぎの引用はその全文である。

「ひとりの労働者が法廷で、誓いの形式は世俗式がよいか、教会式がよいか尋ねられた。彼は答えた。『私は失業しています。』—— K氏は言った。『これは単なる精神錯乱ではありません。この答えによってあの労働者は、彼がそのような質問どころか裁判そのものかもはや無意味な境遇にあるということを確認させようとしたのです。』」<sup>9)</sup>

この断章もまた、裁きがうまく進行していない例である。それどころかこの裁き自体が「無意味」なものであるとまで述べられている。さらに、用語に注意してみると、「労働者」、「失業」、「教会」というように東洋を的確に指し示す（いいかえれば瞬時に東洋的と判断できるような）ものではない、もっとはっきり言うならば、東洋よりもむしろ当時のドイツの社会状況の方によりよく当てはまるような言葉が使用されている。ここには、東洋を想起させるものはまったくない。

ここまで見てきた、裁きに題材をとった4つの断章は、その描かれ方に応じてそれぞれ理想的な裁きを描いた2章（「友情への奉仕」、「司法」）と、非理想的な裁き（「提案が受け入れられないときの提案」、「的を得た答え」）の2章に分けることができる。つまり、これら2つのグループはテーゼとアンチテーゼの関係になっていたのである。そしてさらにここで気づくのは、東洋モチーフを使用した章はいずれも理想像の側にあるということである。その反対に、さまざまな問題を抱えた現実を描写する際には、時間および場所が全く規定されないか、または西洋モチーフが使われるかのどちらかである。いずれにせよ、ここには東洋が参画する余地がない。ここで、裁きに関わる東洋モチーフの意味もはっきりする。東洋は、あまりにも理想化されすぎた形で描かれている。たとえ理想的なすがたが重ね合わされているとしても、それがあまりにも度を超えたものであったとしたら、それをそのまま鵜呑みにして解釈することは逆に難しくなってくるのである。東洋モチーフは現在の西洋では実現不可能なユートピアを表現するものだったのである。

ブレヒトは自らの演劇に「異化」という手法を導入し、新しい演劇の姿を模索したが、<sup>10)</sup> そもそも「異化」とは、現実とはちがったように（ある程度誇張された形で）物事を描くことによって、逆に現実の問題について考えさせることを目的としたものであった。しかし、この「異化」は、演劇に限った技巧ではない。『コイナー氏談義』のような散文作品にも適用可能な概念なのである。なぜなら、「コイナー氏談義」は、単独で刊行されたことはなく、いつもある戯曲作品にその注釈代わりとして添えられるのが常であったからである。この散文作品に演劇的な概念をあてはめることも的外れなことではないであろう。「異化」の考え方にしたがえば、「異化」によって別様に描かれたものは、それ自体に意味があるのではなく、それを通して現実を見るための鏡として機能するのである。とすれば、東洋モチーフがいかに理想像として描かれていようとも、それで「東洋＝理想像」の図式が成り立っているわけではなく、単なる鏡としての機能上、理想像としての性格が付与されているにすぎないのである。つまり、東洋モチーフは西洋的な問題を考察するためだけに必要な考察の道具である。そのような東洋はまた、西洋の問題が容易に解決されるならば、はじめから登場する必要のないモチーフなのである。

## 4

ではそのような〔デーゼ＝アンチデーゼ〕構造の中に引き込まれた読者は、どのような思考へと導かれていくのだろうか。この問いは同時に、東洋をユートピアとして描くことの意味を問うことにもなる。ここでは、この〔デーゼ＝アンチデーゼ〕構造の機能を理解するために、1929年から1932年までの一連の教材劇に目を向けてみよう。教材劇の中で、最初に書かれたのは『リンドバークたちの大洋横断飛行』（1929年初演、のちにタイトルから「リンドバークたちの」が外され、単に『大洋横断飛行』となった）である。内容は、確かに大西洋横断飛行に成功したリンドバークを描いたものであるが、「リンドバークたち」と複数形になっているところに、この作品独自の視点が存在する。複数形を使うことで「この主人公が無名の多くのひとびとの労苦に担われた存在であること、かれらの一員でしかないことを、示して」<sup>11)</sup> いるからである。この作品は、リンドバークの飛行という歴史的出来事に対して、とりあえずあるひとつの見方を示したにすぎないが、これには全く別の展開を持つ、アンチデーゼとも言える作品が存在する。『了解についてのバーデン教育劇』（1929年初演）である。この作品は、『大洋横断飛行』と

は逆に、横断に失敗し途中で墜落した飛行士および整備士たちの物語である。墜落した飛行士は、死にたくないと助けを求めるが、結局助けがさしのべられることはない。ただ「人間は人間を助けない」<sup>12)</sup>という事実がくりかえし確認されるだけである。この作品でテーマとされているのは、技術の向上のみに重きを置く進歩思想とそれに付随するヒロイズムを批判し、またその結果として生じた冷酷な社会（「人間は人間を助けない」）をそのままの形で描写することである。そのような世界を実際目の当たりにすることで、観客は現状改革の必要性を認識するに至るのである。アンチテーゼは、現実を過度に誇張した非現実的な世界を描くことで、逆に現状改革の必要性を認識させることをその目的とするものなのである。その際観客（散文作品なら読者）に提示された非現実的な世界が、『バーデン教育劇』では徹底した非情さであり、『コイナー氏談義』では徹底したユートピアだったのである。<sup>13)</sup> 非情さに象徴される冷酷な世界とユートピアとは、一見相矛盾したモチーフのように思えるが、いずれも非現実的な世界を示しており、それが示されることによって逆に現状改革の認識を生じさせるという点で共通の土台にあるものなのである。

また、アンチテーゼの持つ機能については、先に触れた「異化」の概念を使って考察することも可能である。まず、「異化」とは具体的にどのようなものか。『V効果』という、哲学者・俳優等複数の人間が対話する形式で書かれた小論を見ておこう。

「感情移入は特別な出来事をあたりまえのことにしてしまうことであるが、異化はあたりまえのことを特別なことにするのだ。」<sup>14)</sup>

では「異化」という目的を実際の舞台で達成するためには、どんな技法があるだろうか。ある女優が男の役を演じたのを見て、哲学者はつぎのように言う。

「もし、この男の役を演じるのが男の俳優だったら、本当に男性的なものや一般的に人間共通と思われる多くのものを際だたせることはできないだろう。しかし今のように、女がこの男の役、正確に言えばこの出来事を演じてみると、そこでは典型的に男性的なものが演じられているのが分かる。したがって……男が男を演じる際には、女性ならその役にどのようなイメージを与えるかを考えてそれを表現しなければならないし、また女が女を演じる際には、男ならその役にどのようなイメージを与えるかを考えてそれを表現しなければならないのだ。」<sup>15)</sup>

このあとの文脈では、子供に大人の役を演じさせることによって、大人の振る舞いを奇異なものや特別なものに見せることができることも述べられている。つまり、男に特徴的な振る舞いを「異化」し、観客に考察を迫ろうとするのなら女が演じ、一方、大人の振る舞いを「異化」しようと思えば、子供が演じればよいということになる。同様に、西洋的な問題を奇異なものとして提示し、それについて考えさせるには、非西洋的なモチーフを使って描けばよいのである。「異化」という側面から考えてみても、非西洋モチーフは西洋が目指すべき理想像をただ夢想するためにあるのではなく、西洋に現に存在する問題を映し出すための鏡だったということができるのである。

## 5

文学作品に登場する非西洋モチーフを検討する際に必ず考慮に入れなければならないのは、当時の帝国主義的対外膨張政策との関係である。帝国主義は必然的に、他国との間に「支配=被支配」関係を作り出す。その支配関係のもとにあるのは、自国は技術的・文化的に優れているのだという優越意識である。<sup>16)</sup>したがって、この時期において非西洋モチーフを作品中に導入すれば、否応なしにこの優越意識と関わりを持つことになるのである。ヨーロッパが再び戦争に向かい始めている中で、ドイツの急進的な改革を求めたブレヒトであればなおさらである。優越意識との関わり方はつぎの2つのいずれかの形式をとる。すなわち、優越意識に無条件または何らかの抵抗を示しながらも飲み込まれてしまうか、それに戦いを挑み、完全にではないにしても克服のための鍵を手に入れるかである。では、ブレヒトの東洋観は、この問題に関してどういう態度をとっていたのだろうか。これまで概観してきた非西洋モチーフには、自文化の優越意識という価値観にとりこまれた側面と、それを脱却する可能性を秘めた進歩的側面の両者を認めることができる。はじめにブレヒトの東洋受容が持つ問題点を考えてみよう。

まず、前にすでに引用した断章「的を得た答え」をもう一度検討してみよう。

「ひとりの労働者が法廷で、誓いの形式は世俗式がよいか、教会式がよいか尋ねられた。彼は答えた。『私は失業しています。』」

この断章でとりあげられていたのは、失業という問題であるが、言ってみればこれは高度に文明化・工業化した国の問題である。失業という問題は、近代的な生産システムがあつてはじめて生じるものである。ここには「異化」効果はなく、高度文明化社会の問題がそのままのかたちで——多少のイロニーをふくむものの——提示されているだけである。ところで、西洋に起こった問題を違った角度から見せ、それによって読者に現状改革の必要性を認識させるのが「異化」の目的であつた。またそのためには、西洋とは全く異なった世界（つまり東洋）を用いて描写するのが、もっとも効果を發揮する手段であつたことも先に述べたとおりである。だとすれば、ここでブレヒトの東洋モチーフに関する重要な問題が浮かび上がってくる。つまり、西洋に起こった問題が、急激な工業化を果たした社会に起因するものであり、それを東洋が「異化」するのだとしたら、ブレヒトの意図がたとえそこになかったとしても、この作品全体が必然的に東洋は非文明的な、技術的に遅れた存在であるという前提に立っていることになるのである。

西洋的諸問題に関する「異化」の機能を、もうすこし詳しく検討するために、つぎの引用を見てみよう。「もしサメが人間だったら」という章の冒頭部分である。

『「サメがもし人間だったら」と、家主夫人の小さな娘がコイナー氏に聞いた、『サメは小さな魚たちにもっと親切にしてください。』『もちろん』と、彼は答えた、『サメがもし人間だったら、海の中に小魚たちのため大きな箱を作らせて、その中にいろいろな動植物のえさを入れておくことでしょうか。・・・』』<sup>17)</sup>

このあとのコイナー氏は、サメが小魚たちのためにする善意的な行いを列挙していく。しかし、そのコイナー氏の言葉は、つぎの一文を境に突如として変化する。

「たとえば、一匹の小魚がヒレをけがしたりしたら、すぐに包帯を巻いてあげることでしょう。サメにとって、その小魚に早々と死なれないようにするためです。」<sup>18)</sup>

ここから、一見善意から行われているような処置の裏に、実は支配欲が隠されていることが明らかにされていく。



「あらゆる低俗で唯物的で利己的でマルクス主義的な傾向にならないように、小魚たちは気をつけなければならないでしょう。そしてもしそのうちの一匹にそのような傾向が現れたら、すぐさまサメたちに報告しなければならないでしょう。もしサメが人間だったら、もちろん互いに戦争をするでしょう。よその箱や、よその小魚たちを支配するためです。戦争は自分たちの小魚にやらせるでしょう。」<sup>19)</sup>

ここでは、「マルクス主義」と明らかに西洋起源のものを示す言葉が使用されている。「戦争」や「支配」は西洋に限ったことではないが、直前の「マルクス主義」を受けて言われている以上、西洋が行ったそれを指すと言える。この部分では、さまざまな問題を抱えた西洋社会が、サメと小魚という比喻を使って「異化」されているのである。<sup>20)</sup>「異化」効果が力を発揮するのは、打算的に思考し、自分より弱い小魚を統率するのが、何よりもそのような行動をしそうにない、つまり行動が本能によるところが大きいであろうサメであるからである。もっともそのような行動をしそうにないものが、その行動に出る様を描いてみせること——これが「異化」という技法の鍵を握る大きな要素なのである。高度な工業化を達成している西洋の問題をもっとも効果的に「異化」できるものは、人間ではないサメか、そうでなければ西洋の対極にある東洋しか存在しないのである。<sup>21)</sup>

ではブレヒトの東洋観の進歩的な側面とは、どのようなものだろうか。彼と同時代に東洋に興味をもった知識人、たとえばヘッセやユングは東洋に対してある一定のイメージをはじめからもっていた。つまり、東洋を測る尺度がまず初めに存在し、東洋はその尺度に当てはめられることで、評価を下されていたのである。ブレヒトの場合はどうか。結論から言えば、彼の場合確かに東洋に対してある一定のイメージを生産してはいるが、このテキストの性質上、どのモチーフにどのイメージが当てはめられていたとしても、それはいつでも変更可能な状態に置かれるため、永久に固定化されない。「東洋＝非文明化社会」というイメージも最終的な結論ではないのである。では、イメージの固定化を回避するテキストとはいったいどのようなものだろうか。つぎの2つの断章（「弱くなる権利」と「救いのない少年」）を比較してみよう。まず、「弱くなる権利」の中の、K氏が助けてやった人から感謝されないと不平を言い、それを友人たちが諫める場面である。

「彼ら（＝友人たち）は、K氏の態度を不作法であるとし、またつぎのようにも言った。『人は感謝されることをあてにして物事をすべきでないということ君は知らないのか。人間というものは弱いので、感謝することがで

きないのだ。』『それなら』とK氏は尋ねた。『私は人間ではないというのか。なぜ、感謝を要求するほど弱くなつてはいけないのか。』<sup>22)</sup>

つぎは「救いのない少年」からの引用であるが、持っていた20ペニヒのうち10ペニヒを取られた少年をある男がなぐさめている場面である。

『もっと大きな声で叫べなかったのかい』とその男は尋ねた。『叫べなかった』と少年は言つて、その男を新たな期待を持って見つめた。その男が微笑んだからである。『だったらそっちもよこせ』と男は言つて、少年の手から最後の硬貨をもぎとつて、何もなかったように行つてしまった。』<sup>23)</sup>

「なぜ、感謝を要求するほど弱くなつてはいけないのか。」というK氏の言葉から、最初の引用文「弱くなる権利」で言われているのは、人間は弱い存在であつてよいということである。逆にその「弱くなる権利」を放棄することは、人間でなくなることであるとも読める。しかし、あとの引用文では、その主張がまったく逆のものとなつてゐる。つまり、はじめに10ペニヒ取られた少年が、男に取り返してくれる期待をしたとたんに残りの10ペニヒも取られてしまうわけだから、弱さを盾にして誰か他の人間に助けを求めても無駄だということになる。そのことを証明して、この断章の冒頭部分はずいぶん何かが格言めいた文句ではじまっている。

「K氏は、被つた不正に泣き寝入りするのは悪い習慣であると言つた。」<sup>24)</sup>

この断章で主張されているのは、不正に泣き寝入りせずにそれを正すべく何らかの行動をとらなくてはならないということになる。

この2つの断章は、人間が弱さを見せることについて、2通りの別々の見方が提示されているということが出来る。前者では、弱さを見せてもよいのだという主張、後者では弱さを見せることがかえつてさらなる不正を呼び寄せるのだという主張である。ここで見いだすことができるのは、〔テーゼ＝アンチテーゼ〕構造である。結局この作品群において、人間の弱さをめぐつては何の解答も提出されてはいない。この問題に対する解答は、いくつかのケースが単に提示されるだけで、あとは読者の決定にゆだられているのである。とすれば、そこで取り上げられている東洋モチーフも例外ではなく、たとえある章において東洋に何らかのイメージが与えられたとしてもそれは未だ流動的なものだということになる。否定的な東洋像も、それ自体に視点を限定してしまうと危険なものになりかねないが、アンチテーゼという機能が

理解され、提示された問題に対して新たな見解を生み出す材料となるならば、それは逆に積極的な意味をもってくるであろう。プレヒトの東洋受容の場合には、ある民族に特定の性格を割り振ってしまうような問題は起こらない。いつも西洋的な問題が設定されてから、はじめて東洋はイメージを持つことになるのである。『コイナー氏談義』は、西洋人が東洋を描写しようとする際に付随しがちな、東洋受容における危険な面（東洋へのイメージの押し付け）を持ってはいるものの、それを克服するための鍵も同じテキスト内に同時に存在していた。つまりこの作品は、ヨーロッパ中心主義的な東洋観を脱する1つのモデルケースとなりうるテキストだったのである。

## 注

- 1) 1915年の„Tsingtausoldat“がプレヒトの全作品において最初に東洋が登場するものである。(Albrecht Kloepper: Poetik der Distanz. Ostasien und ostasiatischer Gestus im lyrischen Werk Bertolt Brechts. München (Judicium) 1997. S. 21) また中国哲学への言及が初めて見いだされるのは、1920年の日記においてである。(Han-Soon Yim: Bertolt Brecht und sein Verhältnis zur chinesischen Philosophie. Bonn (Institut für Koreanische Kultur) 1984. S. 27.) その後プレヒトは20年代前半の間に、道家・儒家・墨家思想にすでに通じていたようである。(ibid. S. 66f.)
- 2) タイトルを列挙すれば、「友情への奉仕」(舞台はアラビア),「独自性」(中国),「司法」(中国),「ソクラテス」(古代ギリシア)である。
- 3) Brecht: Gesammelte Werke in 20 Bänden. Frankfurt am Main (Suhrkamp). 1967. Bd.12. S.389f. 以下G.W.と略し、巻数とページ数のみ示す。なお、引用文中にある「K氏」とはコイナー氏のことで、「戦後(第二次大戦を指す)」に書かれたものは、「コイナー氏」ではなく、「K氏」に関するものがたりということになっている。」(Dieter Wöhrle: Bertolt Brecht: Geschichten vom Herrn Keuner. Frankfurt am Main (Verlag Moritz Diesterweg) 1989. S.45) また、戦前に書かれても、戦後新たに発表されたものも「K氏」と改められている。
- 4) Brecht: G.W. Bd.12. S.390.
- 5) ibid. S.392. なお、( )は原文のまま。
- 6) Wöhrle: Bertolt Brecht: Geschichten vom Herrn Keuner. S.43.
- 7) Brecht: G.W. Bd.12. S.392.
- 8) ibid. S.379.
- 9) ibid. S.389.
- 10) 「異化」は、『まる頭ととんがり頭』(1936年初演)の注釈(Brecht: G.W. Bd.17. S.1091f.)においてはじめて使用された。ここではシェイクスピアの『尺には尺を』(1604)の高揚した情熱的なスタイルを、その場面に雨を降らせ登場人物に傘を持たせることで「異化」することができると説明されている。
- 11) 野村修: プレヒトの世界(御茶の水書房)'98, 220頁。

- 12) 第3幕に登場する言葉。(Brecht: Das Badener Lehrstück vom Einverständnis. G.W. Bd.2. S. 593.) ここでは、現実社会において人間がいかに他人のためにならないかということが、いくつかの例からくりかえし確認される。
- 13) このように見てくるならば、「友情への奉仕」に描かれた理想的な友情（この章の最後の文「それはいかなる特別の犠牲をも必要としなかった」）にも別な読み方が可能になってくる。つまり、この文を「なんらかの犠牲を伴わなければ真の友情は生まれない」という事柄を示すためのアンチテーゼだったと言うこともできるのである。
- 14) Brecht: Der V-Effekt. G.W. Bd.16. S.610. なお V とは Verfremdung（「異化」）を指す。
- 15) *ibid.* S.611.
- 16) 一般国民が持つ帝国意識が、国家の帝国主義政策を支えていたこと、またその帝国意識の中核には人種差別意識があったことについては、木畑洋一編著『大英帝国と帝国意識』（ミネルヴァ書房 '98, 4-8頁）を参照。ここではイギリスの例だけでなく、帝国意識一般について述べられている。
- 17) Brecht: G.W. Bd.12. S.394.
- 18) *ibid.*
- 19) *ibid.* S.395.
- 20) Häußler は、この章のタイトルにもすでに「異化」効果があると指摘している。通常の寓話であれば「もし人間がサメになったら」というタイトルを考えるであろうが、それがここでは逆になっている。この章を読むものはまずこのタイトルに奇異の念を抱くように導かれるのである。(Inge Häußler: Denken mit Herrn Keuner. Zur deiktischen Prosa in den Keunergeschichten und Flüchtlingsgesprächen. Berlin (Brecht-Zentrum der DDR) 1981. S.42. この本は1981年に東独で出版されたことには注意が必要であるが、文学的技巧に関する個々の考察は、注目に値するものがある。
- 21) 東洋は西洋の対極にあるという思想を前提としている研究が今だに存在する。「ヘッセは、合理性と神秘主義の新しい統合をより広範囲に探し求めた。またそれによって西洋的な活動性と、東洋的な自己認識と瞑想への沈潜を結びつけようとした。」(Christoph Gellner: Ost-westliche Spiegelungen. Hesse, Brecht, Grass und Muschg. Stimmen der Zeit: Katholische Monatschrift für das Geistesleben der Gegenwart. Nr. 217.S.844.)
- 22) Brecht: G.W. Bd.12. S.380f.
- 23) *ibid.* S.381.
- 24) *ibid.*

## Antithese, Utopie, Spiegel —— Östliche Motive in den „Geschichten vom Herrn Keuner“

Masanao WATANABE

Dieser Aufsatz behandelt östliche Motive in den „Geschichten vom Herrn Keuner“, die als Geschichtensammlung von 1929 bis 1956 (Brechts Tod) fortgesetzt wurden und die insgesamt 87 Geschichten enthalten.

Das hauptsächliche Interesse dieses Aufsatzes liegt bei den Geschichten, die Prozess oder Urteil thematisieren. Man findet vier solche Geschichten in diesem Werk, von denen zwei („Freundschaftsdienste“ und „Rechtsprechung“) östliche Motive enthalten, die beiden anderen („Vorschlag, wenn der Vorschlag nicht beachtet wird“ und „Eine gute Antwort“) hingegen nicht. Warum gibt es wohl zwei unterschiedliche Schilderungen für dieselbe Sache?

Die Geschichten mit östlichen Motiven haben außerdem eine andere Schilderungsart als die ohne östliche Motive: Die Prozesse oder Urteile werden zu stark idealisiert, als dass sie in Wirklichkeit vorhanden sein könnten. Das bedeutet, dass der Osten in diesem Werk eine idealistische Welt(Utopie) repräsentiert. Aber man kann nicht sagen, dass diese Welt das Ziel Europas darstellt, sondern dem Osten wird nur die Rolle gegeben, damit die europäischen Leser sich an eine von dem Ideal weit entfernte Realität wenden können. Die östlichen Motive funktionieren als Antithese oder Spiegel der europäischen Probleme. Aber darin steckt ein gefährlicher Gedanke. Die europäischen Probleme in diesem Werk (z.B. die Arbeitslosigkeit, die gestörte öffentliche Ruhe etc.) stammen von der hochindustrialisierten kapitalistischen Gesellschaft her. Die Tatsache, dass der Osten die Antithese Europas ist, bedeutet dann automatisch, dass der Osten keine industrialisierte Welt sein kann.

Aber der Osten in diesem Werk hat nicht nur diese problematische Seite. Dieses Werk hat vielmehr die charakteristische Struktur, alle Behauptungen mit Antithesen zu versehen und sie sich gegenseitig widerlegen zu lassen. Durch diese Widerlegung sollen die Leser zu eigenen Standpunkten kommen. Keine Behauptung wird gefestigt, wenn sie auch in einer Geschichte geschrieben wird, sondern es gibt immer die Möglichkeit, vom Eintritt einer anderen Behauptung sofort widerlegt (u.U. korrigiert) zu werden. In solcher Struktur ist auch der Osten keine Ausnahme.

Wenn auch dem Osten alle eurozentrischen Charaktere gegeben werden, so ist das doch vorübergehend. Das Bild vom Osten in diesem Werk hat zugleich einen eurozentrischen, imperialistischen (Aufdrängung der europäischen Ostenbilder) und einen fortschrittlichen Charakter, der den imperialistischen Blick überwinden kann.